

心電計など無線給電化へ

ケーブルの引っ掛かり事故防止

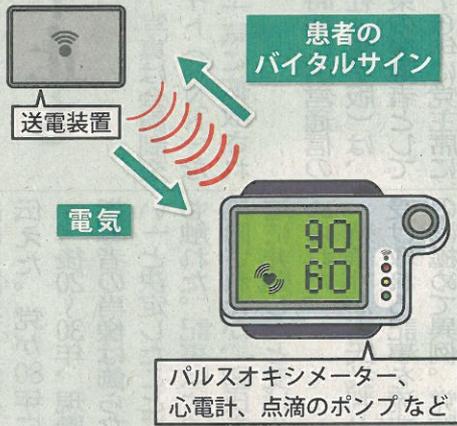
徳大病院助教ら 開発を目指す

徳島大学病院歯科口腔外科の藤原茂樹助教らの研究グループが、電気を無線で送るワイヤレス給電式医療機器の開発に取り組んでいる。多くの電源ケーブルが使われている手術室などでの医療事故を防止するとともに、患者のバイタルサイン（体温、脈拍など）を医療機関のサーバーに伝送できるようにして、救急医療に役立てる。

患者情報の 伝送も計画 救急時に活用

計画では、徳島大理らが開発したマイクロ電装置を活用。血中酸工学部の敷金平准教授が波帯の電波を使った送素濃度を測定するパル

ワイヤレス給電式医療機器の仕組み



スオキシメーターや点滴の薬液を送るポンプ

装置に電力供給し、人体への影響や他の医療機器に誤作動が起きないかを確認する。不整脈の一種の心房細動の検査に用いる24時間心電計にも応用。複数のセンサーを患者の体に取り付けて使用する心電計のワイヤレス化により、患者は測定中も動きやすくなる。

り、ケーブルが絡まったり引っ掛かったりする恐れが解消できると期待される。

県内の医療機関が保管する患者情報の共有システム「阿波あいネット」への接続を想定。救急救命や在宅医療に携わる医師が患者の情報を早期に把握できるようになり、より適切な治療がしやすくなる。

研究は総務省の「戦略的情報通信研究推進事業」に選ばれ、2018、19年度の2年間で上限6千万円の研究費が支給される。

藤原助教は「研究成果を挙げ、医療の安全に貢献したい」と話している。

(山口和也)